資料館見学の手引き

縄文時代のくらし

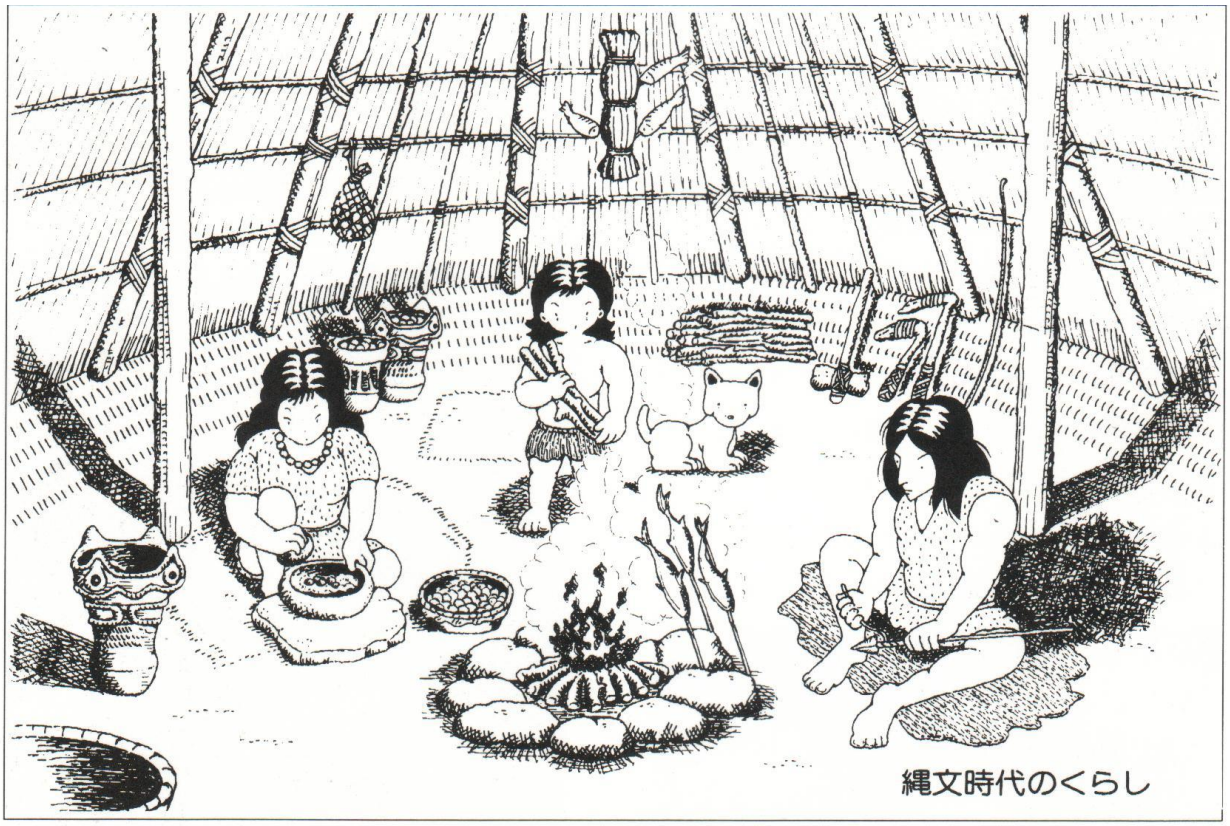
立川市歴史民俗資料館
〒190-0013 立川市富士見町 3-12-34
０４２－５２５－０８６０
２００６年７月改訂

今から約１万3000年前から2500年前までの間、ほぼ日本列島全域で、縄文土器と呼ばれる独特な土器をもつ文化が栄えました。この時代を縄文時代と呼んでいます。

縄文時代の人々は地面を掘って造った竪穴式住居に住み、土器とともに石や木、骨、角などで作った道具を使っていました。鉄などの金属はまだ使われていませんでした。

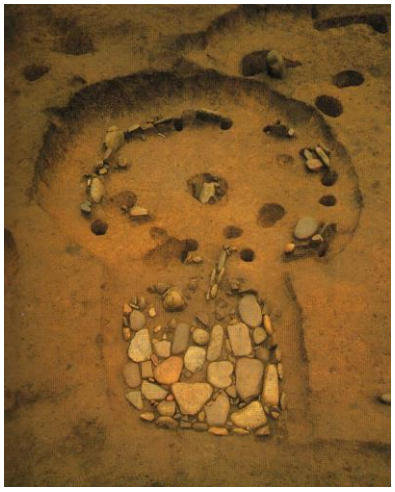
本格的な農業はまだ行われず、木の実を拾ったり、鹿や猪、魚や貝をつかまえたりして食べものにしていました。

市内では柴崎町４丁目の大和田遺跡や錦町４丁目から羽衣町3丁目にかけての向郷遺跡で縄文時代中期（約5000年～4000年前）の大規模な集落が発見されています。



■縄文時代の家

縄文時代の人々は、ふつう地面を 50cm から 100cm ぐらい掘り下げて造った竪穴式住居と呼ばれる家に住んでいました。柱は床に穴を掘ってうめこんで立て、屋根には草や木の皮や土をかぶせていたようです。家の形や大きさは縄文時代の各時期によってちがいます。市内で多く発掘されている縄文時代中期の住居は直径４～５メートルの円形のものや一辺４ｍほどの角が丸くなった方形のものが一般的です。中には、床に石が敷かれた敷石住居と呼ばれるものもあります。床の中央部には炉があり、ここで火を燃やして食べ物を煮たり焼いたりしていたようです。炉の回りに石を並べたものや炉の中に土器をうめこんだものもあります。１軒の家には１家族だいたい４～５人が暮らしていたと考えられます。



敷石住居
向郷遺跡で発見された敷石住居跡です。床に石が敷いてあり、真ん中やや上に石がある所が炉です。

縄文時代の道具

縄文時代の人々は土や石、木などの自然の材料を使って生活のための道具を作りました。

■土器（縄文土器）

土器は土（粘土）を焼いて作ったものです。縄文土器は世界で最も古い土器のひとつです。土器は煮炊きをしたり、貯蔵したりすることに使われました。ものを煮炊きができるようになったので今まで食べることができなかったものが食べられるようになりました。

木の実（どんぐり）が縄文土器の中にたくさん入っています。

向郷遺跡出土縄文土器

縄文土器にはいろいろな形や大きさのものがあります。縄文土器という呼び名は土器の表面に縄を転がしてつけた模様がついている土器が多いからです。

■石器（石の道具）　石鏃

この男の人が手にしているものは石鏃です。石鏃とは矢の先につけて、鹿や猪などをとるための道具です。木で作った矢柄に石鏃をつけているところです。

向郷遺跡出土の石鏃

遺跡では木は腐ってなくなってしまうことが多いので石で作った矢の先の部分だけが発見されます。

■磨石・石皿

この女の人は磨石と石皿で木の実をすりつぶしています。すりつぶした粉で団子やクッキーを作って食べていたようです

向郷遺跡出土の磨石（上）・石皿（下）

■石斧

壁にたてかけられているものは石斧です。石斧には打ち欠いて作った打製石斧と磨いて作った磨製石斧とがあります。

向郷遺跡出土
打製石斧（上）
磨製石斧（左）

打製石斧は木で作った柄につけて、土を掘るために使われました。磨製石斧も柄につけて、木を切ったり、削ったりするのに使われていました。